



終戦後、復活の際の写真。五穀豊穡を願う「たねまき」の舞いの最中

悪魔を払う獅子の舞い
獅子舞は、奈良時代に大陸から日本に伝来したとされています。祭礼で神幸行列に加わったり、地区内の家々を回って庭先で舞ったりすることで、悪魔払いを期待されていた芸能です。
妙口原を含む周桑地域では、複数人が「ゆたん」（獅子の胴体の布）に入る「ムカデ獅子」が伝わります。「なぶりこ」という獅子を操る役が付くことが多く、獅子の頭を上下左右に激しく振り、足を大きく振り上げる舞い方から、あばれ獅子とも呼ばれます。

その頃になぶりこと獅子を務めた青野克之さんは「昔はまつりの他にすることもなかったけれど、地域が一つになれたんだよ」と話します。「獅子の舞いはほんま激しかった。暴れているよなね。教える方も『ほななん

とる間に踊り方やなんや教えたるけん」という言葉を受け、赤堀さんは復活を決めました。
「妙口の獅子舞が分からんようになってしまった。わしらが生きながらた赤堀保さんは語ります。
「年寄りの人らが『赤堀君、獅子をはじめえや』って言うてきたんよね」と、当時の復活に尽力した赤堀保さんは語ります。
「妙口の獅子舞が分からんようになってしまった。わしらが生きながらた赤堀保さんは語ります。
「年寄りの人らが『赤堀君、獅子をはじめえや』って言うてきたんよね」と、当時の復活に尽力した赤堀保さんは語ります。



たもつ 赤堀 保さん



かつゆき 青野 克之さん

じゃいかんかろが』ってうるさかったんよ」。赤堀さんも「太鼓のリズムは変わらんけど、昔の方が獅子が地べたをほうとつたね」と動いてみせます。なぶりこに付いていく際は、うさぎ跳びのようにしていたことも。
今の舞い手が「無理」と音を上げるような激しさは、地域がまつり一色で、獅子役を交代する人数もたくさんいたからこそ、できていたのかもかもしれません。
「年寄りから伝わってきたんを、よう今に伝えられたなあ」と赤堀さん。「もつと過去にも途切れたことはあるやろな。でも『後世に伝えないかん』と立ち上がった人がずつとおつたんやと思う」と話します。

激しく舞った戦後の獅子



まつり1日目、地区内の家で舞う獅子となぶりこ



里に舞う あばれ獅子

地域をつなぐ伝統の復活とその後

稲穂が実り、辺り一面が稲の匂いに包まれるころ、小松・妙口原の獅子舞まつりが始まります。
獅子舞は、長い歴史を持ち、日本を代表する民俗芸能の一つです。当市では20前後の地域で受け継がれていますが、なじみのない人も多いかもしれません。
妙口原の獅子は、遅くとも江戸時代に始まり、分かる範囲で3回休止しています。しかし、そのたびに若者たちが立ち上がり、現在まで残してきました。なぜ完全に途絶えることなく復活を遂げできたのか、地域の方々の思いに迫ります。



全員で支える地域のまつりに

2度目、そして3度目の休止

昭和40年ごろ、獅子は再度休止します。まつりを支える人手不足が原因でした。復活したのは昭和50年代。当時の40歳代の方々が中心となり「妙口原獅子舞保存会」を立ち上げました。

前回の復活時に青野さんと一緒になぶりこを務めた故・近藤昌幸さんが、裏方から指導までを一手に担っていました。しかし平成20年、昌幸さんが体調を崩し、指導を引き継ぐ人がいなかったため、3度目の休止に。昌幸さんの弟の近藤章司さんは「後継者の育成ができてなかった。やけん、人がおらんくなつて自然消滅になってしまった」と当時を振り返ります。

全員がまつりの支え手に

平成25年、5年間の休止を経て、地域の若者が中心となって獅子舞を復活させます。

今年で復活後7年目。練習や準備には、子どもも大人も、妙口原に住む多くの人が集まります。章司さんも「復活のとき、関わる子らに『全員に何らかの役を持って集まってもらわな』って言うたんよ。兄貴を見よつて、まつりは1人が抱えとつたんでは続かんと思った。1人がダメになつても、カバードできるようにせないかん。そんなこと言うたけん、俺も今、来とんよね」と慣れた手付きで、獅子の飾りを縫い付けていました。「住みやすいんは、まちの方でも獅子があるから、みんな妙口原に家を建てて戻ってきてくれるんじゃなかるか」と章司さん。「ここが地元」という意識を自分や子どもたちに根付かせてくれるのは、地域のまつりだと思ふ、と教えてくれました。



1.教わりながら、子獅子の頭の飾り付け
2.章司さんお手製の装置で、ぼんれん作り



しょうじ 近藤章司さん

途切れることなく続けたい

歴代の代表座談会

子どもの頃から獅子やなぶりこを経験し、復活後7年間の代表を担ってきた4人に、それぞれの思いを聞きました。

大人になってから気が付いた獅子への思い
——子どもの頃や、休止前の思い出を教えてください。

近藤啓司さん（以下、啓） 僕は小さい頃から見て「したいしたい！」と思ってたから、楽しかったな。でも高校生になったら、下の子らが誘ってくれても「獅子はかっこ悪い」って、断るようになってたね。

佐伯祥吾さん（以下、佐） 僕は大人になつても参加してた。



平成4年。代表たちが子どもの頃の獅子舞の様子

でも当日だけで、裏方や指導をやるって気持ちじゃなかったな。

清水桂二さん（以下、清） やりたい気持ちはずっとあったよ。休止の前年に、次の年は自分の子がなぶりこする前で獅子を振るんやつて、楽しみにしてた。けど無くなつてしまった。毎年まつりの時期は、同級生と「今ごろは獅子しよつたのにな」って話しよつたな。

近藤崇司さん（以下、崇） たまたま若手で集まった時に「復活させよや！」ってなつて、翌年にはみんな復活させたね。「今復活させてくれんなら獅子の頭捨てる」ってくらいの覚悟で挑んだ。地元の人らみんな喜んでもらえるまつりにしたいから、みんなに負担がかからないように気を付けたね。

未来につないでいくためにできることを

代表の時に苦労したこと、意識したことはありませんか。
崇 全部しんどかった。覚えとる舞いが正しいか分からんからみんなで記憶を突き合わせた。裏方も片っ端から帳簿に目を通して、上の世代の話聞いて、何とかやつたんよ。あと「当日だけ行けばいい」って雰囲気を変えたかったから、練習から大人にも来てもらつて、みんな関わつていくようにしたね。

佐 地域外のイベントにも積極的に参加するようにしたかな。僕が子どもの頃はだんじりのまつりに負けてるって感じてた。だから、獅子を知らん人たちにも僕らのまつりを知ってもらいたかつたんよ。発表の場を増やすことで、なぶりこの子らに

「誇り・自信」を持つてもらう機会にもしたかつた。

今後の展望は。
崇 子どもらの草鞋やなんかも自分らで作れるようにしたい。まつりに関わるいろんなことを俺らで継承していけたら、より一層、愛着が湧くやろなつて。あとは、地域の人が顔を合わせられる場所として大切にしていきたいな。

清 まつりは楽しんでるんよ。引越してきた人でも参加してみよかな、つて思える環境を維持していきたい。
佐 僕はこの獅子が好き。子どもたちにもそう思ってもらふことで、未来にもつながつていくと思ふな。

啓 途切れたものを復活させたからには、長く続いてほしい。今の子どもたちが継いでいくてくれたらうれしいね。



練習最終日には、保護者を含め、約50人が集会所に集まつた



1.子どもたちに振り付けを教える現代代表の近藤啓司さん。「練習中はどうしても厳しくなる」と真剣な表情 2.難しい足の動きを足形を使って確認中 3.大人たちから獅子の手や足の動きを教わる 4.週に3回の練習には毎回15~30人が集まる 5.「僕も踊りたい!」と教えてもらつて振りまねる 6.ぼんれんの高さやタイミングをそろえる 7.休憩中も真面目な表情で先輩たちを見つめて練習



3代目代表 佐伯祥吾さん
2代目代表 清水桂二さん
4代目代表 近藤啓司さん
初代代表 近藤崇司さん

妙口原の獅子舞となぶりこを詳しく紹介します。

舞い手の声

獅子・子獅子・なぶりこ、それぞれの舞い手の思いを教えてくださいました。



獅子で参加

村上 清さん(右)
・穂高さん

最初は反対。でも今は、人とつながれる場がうれしい

清さん 復活させるって聞いたときは、がっかり反対した。穂高が小学校低学年だったから、練習あるし、大変やもん。でも、子ども同士のつながりを考えて参加することにしたんよね。今でも続けてるんは、やっぱり楽しいからなんかな。中学生になった息子と一緒に獅子を振れるんもうれしいね。まつりをしてなかったら地域の顔見知りはずごく少なかったと思う。こういった場はやっぱり大切なんやと思ったね。
穂高さん いつも大人も子どもも一緒にわいわいできて楽しいです。将来就職するときも、ここに帰ってきて、獅子をやりたいと思います。



獅子で参加

田村光司郎さん
(右)・龍之介さん

笑顔で受け入れてくれたから参加できた

光司郎さん 出身は松山で、今年、妻と息子2人と西条市に引っ越してきました。おまつりが無い地域を希望して、妙口原に。そしたら、だんじりはなかったけど、獅子舞があったんですよ。でも子どもが過ごしていくまのこことだから、親の僕が付き合いを断ち切ったらいけないと思って、思い切って参加。飛び込んでみたら、すごくアットホームに受け入れてくれて、それがうれしかったです。来年は長男の龍之介が小学2年生。本人が希望するなら、なぶりことして舞ってみてほしいですね。

頭 制作：昭和59年。手すき和紙が幾重にも貼り合わされ、重量は約3キロ。頭の持ち手は疲労が激しいため、舞いの途中で何度も交代する。



獅子(親)

雄雌の2頭。ゆたんの中に中学生以上の5人が入り、先頭が頭を振る。後ろは両手で布を張り、頭に合わせ足で踏らせる。



ゆたん(布) 頭周辺にはたてがみ、胸には獅子の毛を表す「毛氈文」があしらわれる。

中にはおそろいの「獅子T」を着ています！



子獅子

胸には4人が入り、親獅子の間で舞う。なぶりこを引退した6年生3人が、今年雌の1頭を復活させた。

頭 制作：昭和60年。親獅子に比べると小ぶり。



なぶりこ

獅子の前に立ち、太鼓や笛に合わせて獅子をなぶりながら舞う。獅子1頭に対し1人が付く。今年は小学2～5年生の8人が交代で舞いを披露。

着物・草鞋 地域の方の手作り。

雄には水色、雌には桃色のなぶりこが付きます



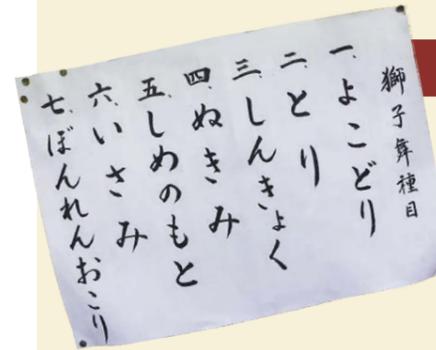
ぼんれん 獅子を操る房の付いた棒。今年は子どもたちも制作に参加。

木札 みんなでおそろい。裏には名前入り。



舞い

全8曲。なぶりこ獅子が向かい合うものと、引き連れて舞うものを組み合わせるなどして披露。8曲目は「たねまき」(3ページ左上に写真を掲載)。



妙口原では、家内安全や無病息災、五穀豊穡を願い、地区の100軒余りを2日かけて回ります。いつからどのようにまつりが始まったのか定かではありませんが、集会所には約170年前から引き継がれる獅子頭が保存されています。小松地域には他に石鎚村・諏訪神社で奉納される獅子舞も。小松音頭の一節には「野には黄金の豊かなみのり そうれ繰り出せばれ獅子」とあり、地域の秋の風景として獅子が根付いていることがうかがえます。

約170年前の獅子頭▼



(左から) 今井智輝さん・戸田幸太さん・曾我侑功さん

3人 初めての獅子。みんなで合わせるんが難しかったけど、親獅子に負けない迫力で舞えました。来年からは親獅子に入るし、もっとがんばりたい。子獅子も来年の子たちに引き継いでいってほしいですね。



子獅子で参加

(左から) 長田悠馬さん・今井大輝さん・今井利優さん・清水 嵐さん

利優さん 今年が初めて。練習はずっと楽しくできました、家でもたくさん練習してました！ 来年はきっと完璧に踊れるし、絶対続けます！



なぶりこで参加

(右から) 戸田来夢さん・曾我佳叶さん・和田桃子さん・戸田泰地さん

来夢さん 1年生から始めて今年で5年目です。なぶりこも楽しいけど、来年の子獅子も楽しみ。中学生や高校生になっても続けたいです。

妙口原に響いた笑い声

10月12日・13日、8人のなぶりこと3頭の獅子で、妙口原の109軒を回りました。当日は、舞う子どもや大人にも、舞いを見る地域の人たちにも、笑顔があふれていました。



4.2日間太鼓を担当。なぶりこ経験者の太鼓ガールズ 5.集会所前での披露には地域の人がたくさん集まる 6.舞いの中では獅子に向かって思いっきりぼんれんを振る 7.「子どもたちに喜んでもらえれば」と、毎年おもてなしをする家も 8.ゆたんがめくれるほどに激しく舞う獅子 9・10.まつり終了後の打ち上げでは、2日間の映像をみんなで鑑賞。「これはようやった！」と笑い声が響く



1.舞いの最後には獅子のゆたんを勢い良く外す。「やりきった！」とこの表情 2.笑顔で踊りきった、今年でなぶりこは最後となった5年生の2人 3.「今年も見られて良かった」と、獅子となぶりこの舞いに笑顔がこぼれる

獅子が舞う里に住む それぞれの思い

地域の方



足利好一さん

自分も昔、獅子しよったから、活があるんがうれしいね。妙口原の秋といえば獅子舞やから、休止のときは、稲刈りだけで秋が終わってしもて寂しかった。これからも長く続いてほしいよね。

婦人会



婦人会の皆さん

獅子が復活して、地域が一つにまとまったような気がします。お手伝いできることはせななって、お昼のおにぎりを作ってます。ずっと続いていくように、縁の下の力持ちとして支えていきたいね。

お母さん



(左から)曾我加奈美さん・清水千恵さん

練習の2カ月は付き添って、当日は一緒に回って、ずっと大変やけど「楽しい」って気持ちの方が大きい。だから、一緒にやられる。一体感と達成感が、疲れを吹き飛ばしてくれるんよね。

おじいちゃん



(左から)佐伯義明さん・近藤章司さん・塩崎静雄さん

息子が小さい頃は「子どものためにやっちゃならないかなあ」と思ってたけど、今は孫たちがなぶりこや獅子をするのが楽しみやね。地域をつないでいくために、じいらもまだまだがんばるよ。

残したいのは

地域の「コミュニティ」の場

「復活時、1軒1軒回るんをやめる案も出た」と話す初代代表の崇司さん。けれど「まつりは妙口原みんなが一堂に集まる同窓会。年代性別なく、妙口原に住んでるっていうつながりで一体感を感じたい」という思いから、「地域全ての家を回ることは譲らなかつたそう。「年に1回、まつりでしか会わん人もおる。舞うのでも、見るのでも、こういう関わりでもいい。地域の人らと顔を合わせられる場としてこれからもやっていきたい」と目を細めていました。

引き継がれていく 舞い手の思い

獅子を見ながら舞うなぶりこたちからは「大人になっても続けたい！」と元氣な声が返ってきます。大人たちの「妙口原の獅子を誇ってほしい」「つないでいってほしい」という思いは、確実に次の代へ受け継がれているようです。地域と世代をつなぐ獅子は、思いを背負い、これからも力強く舞い続けます。



QRコードから獅子舞の動画が見られます。